

大谷大学 地域連携室 事業報告書 2021

Be Real 大谷大学
寄りそう知性

大谷大学地域連携室事業報告書2021

2022年3月31日発行

編集・発行 大谷大学地域連携室

表紙写真

中川学区の暮らし再発見プロジェクト

中川産「まんま茶」茶葉



はじめに



大谷大学長
木越 康

大谷大学の地域連携活動がコロナ禍によって大きく制限されることになって2年が経過しようとしています。多くを中止せざるを得なかった昨年度とは異なり、それぞれに工夫を凝らしてウィズコロナでの新たな活動を実現して下さった皆さんに、甚深い敬意を表したいと思います。

コロナ禍では、多くの人々が「つながり」について考える機会を得ました。「密」を避けることがもはや常識となり、時折メディアを通して見聞きする若い人同士の楽しげで密なる交流の様子に、ふと不安や恐怖を抱いてしまう残念な感情が私の心の内に芽生えてしまっています。飲食を伴うバカ騒ぎ（言葉が汚くてすみません）や、マスクのない「生顔」での対話は、良い時も悪い時も、人との「つながり」から人生の豊かさを学ぶ貴重な経験だったのだということ、今更ながらに思い知らされます。

アフターコロナを待ち望むのか、ウィズコロナを工夫するのか、難しいところですが、若々しい親密な交流に不安や怒りを覚える感情が人々の心に根付く前に、ウィズコロナにおける人間の大切な交わりの代替を、私たちはさらに模索しなければならないのかもしれません。コロナ禍にあっても地域連携活動を止めなかった皆さんに、大いに期待するところです。また新たな活動を、よろしく願いいたします。



地域連携プロジェクト交流会の様子



地域連携室長
野村明宏

現代のように、物事が目まぐるしく変化し、複雑化し続ける社会では、イマ・ココでは当たり前とされることが、ヨソでは違い、アシタには変わっているかもしれません。とはいえ、日々の暮らしの中では、状況の変化や複雑さに手をこまねいてばかりではられませんし、なにが正解かはっきりせずとも、臨機応変に工夫を凝らしながら、手探りで前に進んでいかねばならないこともしばしばです。

そうした場面で発揮される生活知や日常実践の力は、大学の中だけではなかなか学ぶことのできない不定形な知であり、多様性の中でこそ育まれる力だといえるでしょう。いまやユニバーシティという名をもった学びの場は、ダイバーシティ（多様性）という、私たちの目の前の現実に対しても深い関心を向ける場ともなっています。現代の高等教育は、学問的な知識を得ることだけが最終的な目的はなく、社会に積極的にかわり、人生を豊かに歩んでいくための実践的な知や協働する力を学生たちに身に付けてもらうことが重要になっています。

本学の地域連携室は、学生と教員が地域に出向き、地元の人たちと共に学ぶことをサポートする知の拠点です。実践的な知や協働する力の習得は、なかなか一朝一夕というわけにはいきませんが、本報告書は、学生たちがフィールドに飛び込み、自らの体験の中でその第一歩を踏み出した記録となっています。

2021年度の地域連携プロジェクトでは、コロナ禍での制約があったものの、さまざまな工夫を施し、知恵を絞りながら、その多くを実施することができました。プロジェクトの活動自体が、困難な状況を乗り越えるための貴重な実践トレーニングになったともいえますが、地域の皆さまのご理解とご協力なしには、決して成し遂げられなかったものです。

ここに記して感謝を申し上げるとともに、今後とも引き続きご指導ご鞭撻くださいますよう、どうかよろしくお願い申し上げます。

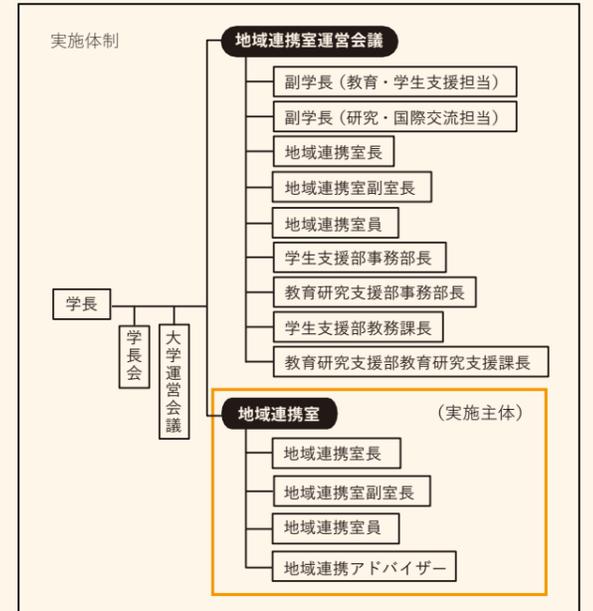
地域連携室について

大谷大学では、地域連携室を設置し、地域に開かれた大学として学びを通じた社会貢献や地域連携活動を支援しています。

2022年度からはじまる第2次中長期プラン「グランドビジョン130」において、地域連携室は社会連携部門の中心と位置付けられ、学内外の関係諸機関と連携し、これまで以上に全学的な取り組みとなるよう進めていきます。

これまでの取り組みは、毎年発行している事業報告書をご参照ください。本学地域連携室ホームページからご覧いただけます。

地域連携室は、文学部社会学科地域政策学コースの開設準備室を母体として、学外でのフィールドワークやPBL型授業の実施を支援するために2015年6月に設置されました。



コミュ・ラボ (響流館1階)

コミュ・ラボは、「コミュニティ」と「コミュニケーション」を軸に社会とのつながりを考え、地域と連携した社会的活動の実践を通して学び成長する学内の拠点です。学生が行動力や課題解決力を養い、地域とつながる活動の場として、活動支援や情報発信を行っています。



地域連携プロジェクト

子育て支援、コミュニティラジオなどの情報発信、過疎地域の活性化、環境に配慮した祇園祭の実施への協力など正課授業と関連した地域連携活動を行っています。それらを「地域連携プロジェクト」として位置づけ、学部・学科の垣根を超えて全学的な社会貢献や地域連携の取り組みとして展開しています。



活動レポート▶

4月		
5月		
6月	 網野町海浜漂着プラスチックの調査・清掃活動プロジェクト 現地調査再開	
7月	 祇園祭ごみゼロ大作戦への参加	
	 中川学区の暮らし再発見 「学まちコラボ事業」採択	
	 美山町平屋地区との交流活動 「南丹市まちづくり活動支援金」採択	
	 山間地域の持続可能な地域づくり支援 水尾地区での活動はじまる	
8月		
9月	 駅ナカアートプロジェクト2021 地下鉄北大路駅において展示開始（～11月末）	
10月	 中川学区の暮らし再発見 現地活動の再開（茶葉の収穫）	
	 美山町平屋地区との交流活動 現地活動の再開（聞き取り調査）	
	 山間地域の活性化支援プロジェクト 「右京区まちづくり支援制度」採択	
	 WAのこころ創生プロジェクト 活動はじまる（動画制作）	
11月		
12月	 「京都・中川まんまビール」本年度醸造分の販売開始（第1弾）※即時完売	
	 子どものまち・紫竹自治会応援プロジェクト 地域主催イベント「紫竹ルネサンス」への参加	
1月	 まちの居場所 現地活動の再開（原谷子どもカフェ）	
2月	 「京都・中川まんまビール」本年度醸造分の販売開始（第2弾）	
	 コミュニティラジオ番組「大谷大学ハッピーアワー」放送300回を迎える	
	 WA（わ）のこころ創生プロジェクトにて制作した動画の公開	
3月	 紫竹自治会や地域の店舗とコラボしたドリップコーヒー完成	
	 中川学区の暮らし再発見プロジェクト・コミュニティメディアプロジェクトが  大学校友会から「菩提樹賞」受賞	

「緊急事態宣言」または「まん延防止措置」が発出されていた期間

地域連携プロジェクト
活動レポート

	ページ
1 中川学区の暮らし再発見プロジェクト	P 5
2 コミュニティメディアプロジェクト	P 7
3 聞き取りを通じた共生社会推進プロジェクト（左京）	P 9
4 まちの居場所	P 11
5 南丹市美山町平屋地区と大谷大学の学生との交流活動	P 13
6 駅ナカアートプロジェクト2021	P 15
7 網野町海浜漂着プラスチックの調査・清掃活動	P 17
8 山間地域の持続可能な地域づくり支援（柚子）	P 19
9 WA(わ)のこころ創生プロジェクト	P 21
10 紫竹自治会応援プロジェクト	P 23
11 北区こどものまち	P 24
12 祇園祭ごみゼロ大作戦	P 25
13 北部福祉フィールドワーク	P 27
14 子ども・子育て支援プロジェクト	P 28



凡例

-  主な学外活動の実施エリア
-  連携団体の名称（所在地等）
-  活動期間 ※学内準備等含む
-  関連する科目名
-  参加学生の所属・学年

（次のページから表記）

1 中川学区の暮らし再発見プロジェクト

担当教員
Shido Shushi
志藤 修史



プロジェクトデータ

- 京都市北区中川学区
- 中川社会福祉協議会（北区）／特定非営利活動法人HEROES（上京区）
- 2021年4月～2022年3月
- プロジェクト研究入門、プロジェクト研究実践
- 社会学部コミュニティデザイン学科
第1学年13名 第2学年11名 第3学年16名 第4学年8名



公益財団法人大学コンソーシアム京都 令和3年度「学まちコラボ事業」認定事業

プロジェクト概要

本プロジェクトは、2015年度から中川社会福祉協議会との連携事業として進めています。京都市北区中川学区は京都市北部の山間地域に位置し、中川・杉阪・真弓という3地区からなっています。川端康成の『古都』にも登場する地域であり、古くから北山杉で知られる林業で栄えてきた町です。しかし今では、住宅建築様式の変化などにより、中心だった林業は衰退しています。さらに少子高齢化、人口減少が進み、商店や金融などは撤退。最寄りの病院やスーパーまでは車で20分以上かかる状況になっています。公共交通機関であるバスは中川集落のみ停留所があるのですが、杉阪・真弓にはバスは通っていません。自家用車中心の生活によって、人によっては外出が困難な状況となっています。しかし、一見すると「暮らしていくのは大変そう…」と

とらえがちですが、決して大変だけではなく、そこにはかけがえのない地域の人たちが紡いできた自然の風土や文化、地域行事などへの思い、住民同士の助け合う風土など、これまで作りあげてきた歴史や暮らしの文化があります。

本学では、このプロジェクトを通して、地域に暮らす人々の思いを大切に、地域の抱えている課題や、地域のこれからのことを共に考えていきたいと思っています。また、地域に残る伝統や文化の積極的な発信、地域の資源を活用した新たな生活文化を創造するきっかけづくりなどにも取り組んでいきたいと思って活動をしています。山間の地域での暮らしのお話は驚くこともたくさんあります。何度も地域を訪ね、お話を伺い、さまざまな活動を共有する中で、暮らしを知り、そしてともに考えるという経験につながっていると感じています。

活動内容と成果

中川での大谷大学の活動も7年目を迎えました。これまで、毎月1回、中川社会福祉協議会が実施している「健康ふれあいクラブ」に参加し、参加者である学区の高齢者、さらには行事を実施する中川社会福祉協議会のメンバーの方、毎回参加される関係機関の方々との交流を通じて中川の暮らしの実態を多角的に把握する活動を行っています。真弓地区では、学生が主体で行うサロン活動「and house.」を実施。地元住民有志の方が進めてこられた昔から地元で栽培されてきたお茶の復活プロジェクトへの参加。2019年度からは福祉事業所NPO法人HEROESとの連携で、このお茶を使ったビール「京都・中川

まんまビール」の製造にも取り組んでいます。また、地域の活動の様子や四季折々の地域の風景などの写真や動画をSNSで発信する活動、生活実態の調査（2015年～2017年）、夏祭りなどの地域行事への参加などを進めてきました。

今年度は昨年度と同様に新型コロナウイルスの影響を受け、いくつかの活動は実施できない状況になっています。「健康ふれあいクラブ」は11月からようやく再開し、約1年半ぶりに学生の参加も可能となりました。現地でのサロン活動「and house.」は、実施できていません。また地元行事も中止が相次ぎ参加ができません。



私たちが摘んだお茶葉が
西陣麦酒のクラフトビールになります！



このような中「京都・中川まんまビール！」の製造については、学生が主体となり大学コンソーシアム京都 令和3年度「学まちコラボ事業」認定事業の助成金を獲得し、製造することができました。また、助成金の申請を通じて、活動の特徴や意味、今後の方向性などを再度確認する機会となりました。活動時に撮影した動画や写真をFacebookやInstagramなどのSNSで発信し、自分たちの活動をはじめ中川を知ってもらうための情報発信をすることができました。



社会学部
コミュニティデザイン学科 第2学年
有澤紫織 Arisawa Shiori

本年度は、まんま茶を使用した「まんまビール！」の販売やコロナの影響によって活動ができなかった「健康ふれあいクラブ」などの現地での活動を再開することができました。これからも地域の方々との交流を深め、人との出会いを大切に、より多くのことに挑戦していきたいと思っています。



日々の活動報告は、
学生発信のSNS

#otaniandhouse
をご覧ください！



#otaniandhouse

このように本年度は活動の制限を受けながらも、今何ができるのかを議論し、取り組む方法を検討しながら進めてきました。活動の様子は「中川学区の暮らし再発見プロジェクト活動記録集Vol.7」として冊子にまとめています。閲覧を希望される方は、地域連携室までお問い合わせください。



社会学部
コミュニティデザイン学科 第2学年
徳山佳哉 Tokuyama Yoshiya

本年度、中川では「健康ふれあい」と「まんまビール！」の取り組みを行いました。中でも、「まんまビール！」は、商品を通じて中川のことを知ってもらいたいという思いで活動してきました。来年はもっと住民の方と交流する機会が増えれば良いなと思います。

2 コミュニティメディアプロジェクト

担当教員
Akazawa Kiyotaka
赤澤 清孝



プロジェクトデータ

- 京都市北区
- 特定非営利活動法人コミュニティラジオ京都（北区）
- 2021年4月～2022年3月
- プロジェクト研究入門、プロジェクト研究実践
- 社会学部コミュニティデザイン学科
第1学年 15名 第2学年 19名 第3学年 19名



プロジェクト概要

3学年の合同の演習として、大学のある北区北大路エリアの情報発信をテーマとしたプロジェクトを行いました。

北大路エリアは、京都市内中心部の京都駅や烏丸、河原町エリアに比べてタウン情報誌などのメディア掲載もあまりありません。また北区には上賀茂神社、金閣寺などもあり周辺地域の情報は旅行雑誌などでも取り上げられていますが、北大路駅周辺は掲載が少ないというのが現状です。こうしたなか、学生が地域に密着した情報を取材し、発信に取り組むのがこのプロジェクトです。メインの対象層は、この地域で暮らす、働く、学ぶ若い世代です。この地域での生活歴が少なく、地域の情報を求めている層にインターネット等を通じて情報を届け、人やお店とのつながりづくりを促します。

2016年からはコミュニティラジオ局にて毎週1回の50分番組を放送。2021年度も継続して取り組んでいます。また、2017年8月に開設した地域情報サイト「キタキタ！」も継続して制作。この他、情報誌「キタキタ！」の第5号も制作しました。

これらの取り組みを通じて、学生が地域に埋もれていた面白いお店やイベント情報を知ること、地域の人の暮らしや仕事の面白さ、大変さなどを知ること、また、パソコンを使っての情報発信スキルや、対人コミュニケーションのスキル向上を図ることを目指しています。



活動内容と成果

ラジオ番組「大谷大学ハッピーアワー！」を毎週木曜日19時に放送。年間52回放送し、地域の商店主やNPOスタッフなど多数の方にゲストとして登場いただきました。コロナウイルスの影響もありましたが、オンラインでの収録、放送を行うなど、感染対策を図りつつ、実施することができました。情報サイト「キタキタ！」では、従来の記事コンテンツの制作に加え、北区が立ち上げた地域サイトFUNAOKAに赤澤ゼミとして学生の取材記事を寄稿するなど、連携が進みました。

また、情報誌「キタキタ！」第5号では、コロナ禍で暮らしが大きく変わり、家の中で過ごす時間、

家族で過ごす時間が増えたことを踏まえ、ウィズコロナ時代の暮らしをテーマに誌面を作成した他、北大路商店と連携し、商店街の歴史や新旧のお店を紹介しました。

これらの取り組みを通じ、学生たちと、地域の面白い若者、大人とのつながりが生まれたほか他、地域の人たちの様々な生き方、働き方に刺激を受けています。

また、学生たちは、番組や情報誌づくりなどに必要な企画力、チーム運営に必要なマネジメント能力、会話力(コミュニケーション能力)を身につけることができました。



ラジオ番組では毎回ゲストをお招きしています。学生発信のSNSをご覧ください！



大谷大学ハッピーアワー & キタキタ Facebook



地図で場所を確認
取材先へのアポイントも
お手のものです



北大路エリアの情報サイト「キタキタ！」
(情報発信の詳細は、巻末30ページ)



社会学部
コミュニティデザイン学科 第1学年
浅野元佑 Asano Genyu

初めて地域情報サイトの制作を担当しました。慣れないインタビューや記事の作成に苦労しましたが、先輩が優しく教えてくださったのでやり遂げることができてよかったです。インタビューをするということは、単に質問するのではなく、相手との会話の流れのなかでうまく質問していくことが大切だと学びました。



社会学部
コミュニティデザイン学科 第3学年
大橋広夢 Ohashi Hiromu

生放送という時間が決まっているなかで、ゲストの方の魅力を引き出すことの難しさや、言葉だけで表現することの大変さを実感しました。マイクを前にしての緊張感は回を重ねても慣れませんが、それを楽しむことができるようになった時に、自分の成長を感じることができました。

3 聞き取りを通じた共生社会推進プロジェクト（左京）

担当教員（代表）
Watanabe Takuya
渡邊 拓也



Tokuda Tsuyoshi
徳田 剛
Xu Yanhua
許 燕華
Motobayashi Yasuhisa
本林 靖久

プロジェクトデータ

- 📍 京都市左京区
- 🤝 京都市左京東部・西部いきいき市民活動センター（指定管理者 NPO法人劇研）
- 📅 2021年4月～2022年3月
- 👤 探究フィールドワーク1・2
- 👥 社会学部現代社会学科 第3学年 14名



プロジェクト概要

地域連携パートナーの京都市左京西部・東部いきいき市民活動センター（以下、いきセン）と共に、学生たちが聞き取りを中心とした社会調査（フィールドワーク）を行い、外国にルーツを持つ人々が直面しやすい問題や、共生社会をめざす上での地域社会の課題について考えます。

調査先の地域では、アートやイベントを通じて多様な人々を結びつけるための、積極的な試みがなされています。いきセンは、市民サークル等への貸館事業を営みながら、外国にルーツを持つ人々やその支援者への聞き取り活動を行い、また演劇・音楽・ダンスといったアート活動を通じて、人々の交流を促す仕掛けを実践しています。盆踊りや夏祭りといったイベントの企画・運営など、地域内外の若者や外国からの移住者も含め、バリエーションに富ん

だ人々の交流を生み出す機会を提供しています。学生たちは、いきセンの活動に自らも参加することで、地域の方々と交流し地域貢献をなしつつ、地域社会および市民活動の現状と課題についての理解を深めます。また他方で、自分たちで立案した社会調査を実践することで、調査倫理やコミュニケーション能力を含む応用的な調査スキルを身につけます。さらにそれを年度末の報告書へとまとめていく作業の中で、調査データをどう取り扱い、社会的な見地からいかに考察していくかに関する実践的な理解を深めていきます。

調査結果をまとめた報告書は、いきセンおよび調査にご協力いただいた地域の方々にお渡しして、地域社会へのフィードバックがなされます。



活動内容と成果

本年度はコロナ禍の合間を縫うように、また人数制限をしながら、前後期ともほぼ例年通りのスケジュールで調査を実施することができました。4月には東部いきセンで事業説明を受け、6月にはワークショップに参加、7月には4班に分かれた14名の学生が、それぞれ外国人支援者や団体への聞き取り調査を実施しました。その成果はいきセン制作の冊子「多文化共生を考える」に提供され、素材資料として使用・掲載されました。

後期はまず、コロナの影響で夏休みから10月に延期となった「多文化まつり」に参加し、外国にルーツを持つ人々や地域の人々と交流するとともに、後期の本調査に向けた準備を整えました。本年度、学生が自分たちで考えて決めた調査テーマは「異文化理解と多文化共生への道のり」でした。マスク着用、部屋の換気などのコロナ対策を徹底した上で、11月には外国からの移住者を中心とした4名の方々に調査を実施し、12月以降にその成果を「探究フィールドワーク報告書」にまとめました。

グループに分かれて連携先の施設に向かいます
学外活動は、緊張もするけど活動も充実



様々な背景を持つ方に
インタビューを行いました



いつもお世話になっている
京都市いきいき活動センター



社会学部
現代社会学科 第3学年
中西 一貴 Nakanishi Kazuki

実際に取材を行うのは初めての経験でしたので、当初は、取材先との連絡や、話を引き出すための聞き方を考えるのに苦労しましたが、先生方のアドバイスや、メンバーの協力もあり、実りある取材になりました。取材を行う前は、コロナウイルスの影響もあり海外と日本の文化の違いを感じることは減っていました。しかし、取材を経て、日本と海外との間に文化の違いがあることを改めて知ったことで、文化の違いを埋め合わせる難しさを実感しました。



社会学部
現代社会学科 第3学年
濱田 芽依 Hamada Mei

私は、聞き取り調査をすることが初めてで、最初は対象者の方に上手く聞くことができるのか、少し不安だった。しかし、お話を聞いているうちに、初めて知る文化に心がどんどん惹きつけられ、用意した質問以外のことも自然と聞くことができました。「この文化について知りたい、この人について聞きたい」という気持ちが聞き取り調査を行う上ですごく大切なことなのではないかと私は感じた。人と人との繋がりを強く感じられる貴重な経験となった。

4 まちの居場所

担当教員
Nishimura Takeo
西村 雄郎



担当教員
Ohara Yui
大原 ゆい



プロジェクトデータ

- 京都市北区
- 社会福祉法人七野会（北区）
- 2021年4月～2022年3月
- プロジェクト研究入門、プロジェクト研究実践
- 社会学部コミュニティデザイン学科
第1学年 3名 第3学年 13名



プロジェクト概要

まちの居場所づくりプロジェクトでは地域の社会福祉施設の皆さんと協働しながら、地域の居場所づくりを進めています。いま地域福祉実践の場面では、「地域共生社会」がひとつのキーワードとなっています。そして、多様な背景を持つ人々が関係を紡ぐ「居場所」づくりも盛んに取り組まれています。ここで目指されるのは地域に暮らす誰もが、ともにケアしあいながら、気づかいあいながら生きる社会です。

どのような状況にあっても、住みなれた地域で、自分らしく暮らし続けるためには、保健、医療、介護のサービスだけでなく「居場所」や「つながり」の活動が必要となるのではないかと考えます。

活動内容と成果

2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、活動の形態を試行錯誤しながら、社会福祉法人七野会の皆さん、京都市北区金閣学区の皆さんと一緒に「原谷の子どもカフェ」事業に取り組みました。これは、金閣学区原谷地区で毎月第1水曜日に行われている子ども食堂プロジェクトです。日頃は高齢者への福祉サービスを提供する七野会が子どもカフェの場を提供し、障害者就労支援事業に取り組むカフェレストラン「ソラシド」と地域の金閣福祉会の皆さんが食事を提供し運営されています。コロナ前は、子どもたちと一緒に宿題をやったり、レクリエーションに取り組んだり、季節を感じる食事をともにしたりしながら、地域の「居場所」がど

そしてこれは誰か特別な人に限ったことではなく、子どもも大人も、障害のある人も、ない人も、地域に暮らすすべての人にとって「あったらいいな」と言える場所・活動なのではないでしょうか。

そこで、このプロジェクトでは、住民団体や地域を支える専門機関、大学とが連携をして、学区で暮らす誰もが参加できる「場」と「活動」をつくり、地域やまちづくりに貢献することを目指しています。この活動を通じて、地域で今後さらに大切となってくると考えられる「人と人とのつながり」や、さまざまな立場におかれた人の「居場所」の今日的なあり方について実践を通じて考えていきたいと思っています。

のような人によって、どのようなプロセスで作られていくのかを学んでいました。長引くコロナ禍の影響を受け、これまで通りとはいきませんが、食事の提供をフードパントリー活動に変更したり、動線の確保を工夫したり、人と人との接触を減らしながらもお互いに交流できる方法を模索しています。新型コロナの状況はまだまだ先が見通せませんが、引き続きコロナを経験した私たちの考えるまちの居場所のあり方を考えていきたいと思っています。



新型コロナウイルス感染防止の対策を徹底して取り組みました

約1年半ぶり開催です
準備も万端！



社会学部
コミュニティデザイン学科 第3学年
中根智也 Nakane Tomoya

コロナが急拡大している中でも、できることを工夫して子どもたちが楽しめる取り組みを行なっています。最近、ピザラや餃子の王将といった企業が食事を提供して下さることもあり、多くの人の協力がある活動になっていると感じます。それだけ、協力しあえる関係性、つながりがあるのだと感じています。活動を続けてきて、子どもたちの生活のリアルや社会の状況などを感じてきたので、これからも出来る限り参加していきたいと思っています。



社会学部
コミュニティデザイン学科 第1学年
桑田ひかり Kumeda Hikari

新型コロナウイルスの感染拡大のため、子どもたちや施設の職員さんとの交流が少なく残念に思うこともあります。しかし、そんな中でもたくさん子どもたちが来てくれて元気な姿を見て私もパワーをもらえました。子どもたちの居場所であると同時に、私たち学生や施設の方、地域の方など、幅広い年代の方達が集まり繋がることのできるとても温かい場所だと感じています。

5 南丹市美山町平屋地区と大谷大学の学生との交流活動

担当教員
Shido Shushi
志藤 修史



プロジェクトデータ

- 南丹市美山町平屋地区
- 南丹市美山町平屋地区地域福祉推進協議会（南丹市）、南丹市社会福祉協議会（南丹市）
- 2021年7月～11月
- プロジェクト研究入門、プロジェクト研究実践
- 社会学部コミュニティデザイン学科
第1学年 9名 第2学年 1名 第3学年 2名 第4学年 1名



令和3年度「南丹市学校提案型まちづくり活動交付金」採択事業

プロジェクト概要

本プロジェクトでは、人口減少、高齢化の進む南丹市美山町平屋地区を対象に、生活実態と生活課題および住民による地域福祉活動を学ぶことを目的にしています。受け入れていただいているのは平屋地区地域福祉推進協議会、南丹市社会福祉協議会の皆様。主な活動内容としては、学生による高齢者宅等への訪問活動、平屋地区の高齢者との交流を目的とした「ふれあいカフェ」の開催、また、2018年度からは住民の外出・移動に関する調査、さらに2020年度からは買い物支援のために平屋地区地域福祉推進協議会が実施している「お出かけツアー」

登録者へのアンケート調査などの調査研究を行っています。こうした活動は、過疎地域における具体的課題から学ぶ機会となり、各自の個人研究レポートや卒業論文につながっています。



活動内容と成果

本年度の活動は、昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの感染拡大による影響を受け、規模を縮小して実施することとなりました。地域の皆さまと大学の双方にとって、この状況下でこういった活動ができるかを慎重に議論した結果、2019年から平屋地区で取り組まれている「お出かけツアー」の利用者への訪問聞き取り調査、現地の皆様との懇談会、社会福祉関連機関への聞き取り調査などを実施することとなりました。

具体的には、2021年10月14日・21日に「お出かけツアー」の登録者の方のお宅に訪問し、インタビュー調査を実施。また、参加できなかった登録者の方には地域福祉推進協議会を通じてアンケートを配布していただきました。「お出かけツアー」の活動の停止、日頃の外出機会の減少や子どもや孫など

の訪問機会の減少、移動販売の縮小など、コロナ禍で生じた事態は多くの皆様に様々なダメージを与えており、心身の健康状態が危ぶまれる方もありました。地域包括支援センターへのヒアリング（10月1日）、再開と運営基盤の整備に努力しておられる現地活動者の皆様や社会福祉協議会の皆様との懇談会（10月21日）も実施し、課題の共有と今後に向けた活動の確認なども行うことができ、実り多い活動となりました。

なお、美山町での活動の様子は別途、2021年度の報告書としてまとめています。閲覧を希望される方は、地域連携室までお問い合わせください。

2021年度の本事業は、南丹市学校提案型まちづくり活動交付金により実施しました。



高齢者の買い物支援バス
で地域の足を守ります



平屋地区の福祉協の方に
調査の報告しました



社会学部
コミュニティデザイン学科 第1学年
熊谷颯大 Kumatani Souta

私は2週連続で美山町平屋地区へ訪れて、“ほんまもんの美山”を体験することが出来たと感じています。その“ほんまもんの美山”というのは具体的にいうと、その地域の雰囲気や住民性、地理や自然などです。これは実際にその場へ、現地へ赴かないとわからないことで、それを感じられてすごくいい学びになりました。



社会学部
コミュニティデザイン学科 第3学年
柳田 遥 Yanagida Haruka

私はインタビューを行った後、各ご家庭にアンケート用紙のお渡しに伺いました。その際に、感じたことは直接顔を見てお話することの大切さです。留守の方、体調を崩されていて少ししかお会い出来なかった方もおられました。しかし地域住民の方々の変化は実際に直接お家に訪れたり、お話することで分かることであり、フィールドに出ることの重要性も改めて感じることでできた1日でした。

6 駅ナカアートプロジェクト2021

担当教員
Matsukawa Takashi
松川 節



Kuramitsu Nobuyuki
倉光 延行



プロジェクトデータ

- 📍 京都市北区
- 🤝 KYOTO駅ナカアートプロジェクト実行委員会（事務局：京都市交通局）
- 📅 2021年4月～2022年1月（展示期間 9月22日～11月30日）
- 👥 社会学部コミュニティデザイン学科 プロジェクト研究実践
- 👥 社会学部コミュニティデザイン学科 第4学年 12名



プロジェクト概要

「KYOTO 駅ナカアートプロジェクト」は京都市内の芸術系大学が中心となり、大学生のアート作品で地下鉄駅構内などを装飾し、地下鉄を魅力的なものとして活性化する取り組みです。活力ある京都のまちづくりをめざして2011年度に始まりました。2013年度から大学と地元企業が実行委員会を組織して実施しています。本年度も12の大学が参画しました。大谷大学は、2016年度から地域連携の一環として参加しています。



展示前には、駅の清掃を行っています

活動内容と成果

駅ナカアートプロジェクト10周年の今回は、「NEXT…」が全体の統一テーマです。それを受け、学生たちが本学の作品テーマを「Blooming」に設定しました。明るい未来への期待が込められています。

本年度の展示場所は、例年通り北大路駅構内です。大学最寄りの出入口から近い通路壁面と北大路通北側出入口から入った大階段の壁面に装飾を行いました。また、本年度の新たな取組として、地下鉄ホーム階へ降りるエスカレーター正面にあるショーウィンドウにも展示を行いました。この場所は、駅利用者の目に触れる所ながら長年使われずに空いた状態となっていました。展示を検討していた時に、学生からショーウィンドウを利用したらどうかとの提案があり、交通局との調整の末、作品を展示することとなりました。空調ダクトがむき出しになった

嚴重に管理がされた通路を案内してもらい、ショーウィンドウの裏側にたどりつきました。そのような場所にあるため、他の場所とは異なり限られた作業時間での設営となりました。

これまでショーウィンドウは、長く使われずに暗いまま放置され、それが当たり前の景色となっていました。地下鉄利用者も何も感じずに通り過ぎていました。しかし、今回装飾をして明るくなったことで、これまでその場所がいかに暗かったかを認識させられました。アートにより光が入った格好の事例です。そのためか、交通局からの提案により展示期間終了後も、ショーウィンドウの装飾はそのまま残すこととなりました。北大路駅利用の際はご覧ください。

また本年度も駅ナカアートプロジェクト全体の取り組みをPRする映像制作を行っています。



イメージ



本年度も京都市長から表彰状をいただきました

コロナを「雨」、明るい未来を「花」と見立てて、「雨降って地固まる」という言葉のように、雨は決してマイナスではなく、次に進むためには必要なことと捉え、雨が降るとつまりコロナが流行すると、地固まって花が咲く、つまりオンライン等の情報技術の発展やコロナ終息後の明るい世の中が開ける、そういった意味を込めました。

「Blooming（花開く）」という意味の通り、少しでも前向きに、上を向いて明るくなれるような作品作りを心掛けました。（チーム一同）

7 網野町海浜漂着プラスチックの調査・清掃活動

担当教員
Suzuki Hisashi
鈴木 寿志



プロジェクトデータ

- 京丹後市網野町
- 網野町地域おこし協力隊（京丹後市）、京丹後市夢まち創り大学（事務局：京丹後市役所）
- 2021年4月～2022年3月
（現地活動日 6月30日, 10月24日, 10月31日, 11月6日, 12月5日）
- コミュニティデザイン演習, プロジェクト研究入門, プロジェクト研究実践
- 社会学部コミュニティデザイン学科
第1学年 5名 第2学年 7名 第3学年 16名 第4学年 4名



京丹後市「夢まち創り大学」令和3年度採択事業

プロジェクト概要

海を漂うプラスチックごみは、世界規模で進行する深刻な環境汚染問題として国際的に関心が高まるとともに、その除去の方策に向けた基礎研究が進められている。日本では、とくに日本海側の海岸において冬の季節風で掃き寄せられた大量のプラスチックごみが漂着し、大きな問題となっている。京都府京丹後市網野町の海岸においても、大量のプラスチックごみが漂着するとともに、細粒化し海浜砂にまみれている。網野町には琴引浜という鳴砂の浜が広がっており、綺麗に磨かれた砂がキュッキュと音を立てる。しかしごみの混入で砂が汚染されると、鳴かなくなってしまうという。琴引浜は名勝地であり天然記念物に指定されているため、地元の人びとの努力で清掃が進められてきたが、それ以外の浜では大量のごみが放置されたままである。細粒化したプラスチックは海へ戻って浮遊し、魚が飲み込む。プラスチックは有機系化合物を吸着しやすいため、生態系に影響を与え、ひいては人の体内に蓄積する可能性がある。これらの地域課題・環境問題を解決するにあたって、海岸の清掃活動を行うとともに基礎調査を実施し、課題解決に向けた具体的方策を検討することを目的とした。

2021年度は昨年度に引き続き新型コロナウイルスの蔓延に伴い、活動が制限される場面があった。しかし、昨年度と違い、新型コロナウイルスへの対処方針が示されたこと、緊急事態宣言の発出された期間の谷間が比較的長かったことから、日帰りではあったが比較的多くの日数活動することができた。京丹後市夢まち創り大学の補助を得ながら、浜詰の旅館粹月、網野町地域おこし協力隊（丹後エクスペリエンス）の八隅孝治氏、（株）ジオ研究開発の榎本 晋氏の協力も得て、現地で活動できたことにより、学生たちは実践的学びを深められた。



海岸清掃に加えて、実施している基礎研究の調査内容と結果

毎年実施している調査 <ほぼ例年通りの結果が得られた>

- (1) 小浜・マブ川河口における海浜漂着ごみの国由来調査
→中国・韓国・日本のものでほぼ占められることが分かった
- (2) 海中浮遊マイクロプラスチックの調査
→マイクロプラスチックはほとんど見つけられず、一部繊維状のものが見つかった
- (3) 水晶浜、琴引浜、小浜における海浜砂中のマイクロプラスチック調査
→特に小浜の砂から多くの発泡スチロール片が見つかった
- (4) 網野町で釣れた魚の内臓中に含まれるマイクロプラスチックの調査
→カサゴ2匹から長さ2mm～数mmの繊維状マイクロプラスチックを検出した



網野町の海岸で調査をしました

本年度新たに実施した調査

- (5) 砂浜に散在するマイクロプラスチックを除去する方法の調査
→小浜の砂の粒度が0.25～0.5mmの範囲に集中することが明らかとなった
0.5mm以下の粒子に目立ったマイクロプラスチックが見られなかったため、まずは0.5mmを境にそれより大きいマイクロプラスチックを回収し、0.5mm未満の砂を排出すれば、多くのマイクロプラスチックを除去できることが分かった
- (6) 漂着ごみの中でリサイクルして有効活用できるものの調査
→八隅孝治氏の工房を訪れ、ポリプロピレンからなるペットボトルのキャップが加熱・整形の上、内装タイルなどに再使用可能であることを学んだ



社会学部
コミュニティデザイン学科 第2学年
林 隼毅 Hayashi Toshiki

2年生で初めて訪れた網野町。浜辺のごみを清掃する中で、ペットボトルは日本製のものに加えて韓国・中国製のものが多く見られました。実際に現地に足を運んでみた印象は、自分が思っていた広く美しい海のイメージと違うごみだらけの光景だったことです。



社会学部
コミュニティデザイン学科 第2学年
高野 耕希 Takano Kouki

海浜砂に含まれるマイクロプラスチックを調査しました。浜に打ち上げられた多くのプラスチック片を見て、海洋プラスチック汚染の深刻さを肌で感じる事ができました。この活動を通してやってみたくいことが見つかったので、来年度はさらに活動を進めていきたいと思います。

8 山間地域の持続可能な地域づくり支援（柚子）

担当教員
Suzuki Hisashi
鈴木 寿志



プロジェクトデータ

- 📍 京都市右京区水尾地区
- 🤝 水尾学区自治会（右京区）、水尾特産品加工組合（右京区）
- 📅 2021年7月～2022年3月
（現地活動日 7月28日、10月7日、11月20日、12月4日、12月11日）
- 👥 コミュニティデザイン演習、プロジェクト研究入門、プロジェクト研究実践
- 👤 社会学部コミュニティデザイン学科
第1学年 5名 第2学年 3名 第3学年 6名



令和3年度「右京区まちづくり支援制度（学生枠）」採択事業

プロジェクト概要

新型コロナ感染拡大の影響を受け、本年度は、これまでの活動していた和歌山県古座川町平井地区から京都市右京区水尾地区に変更して実施した。どちらの地区も柚子の里として有名である。その中でも平井地区は、柚子を使った6次産業化に成功した先進地域であり、これから6次産業化を進めようとしている水尾地区の先行事例として、これまでの学びを活かせる好適地である。

水尾地区は、京都市のまちなかから西へ10km弱、車で30分の場所にありながらも限界集落である。集落の衰退と基幹産業である柚子栽培の維持が課題である。日本の柚子栽培発祥の地として有名な地域であるが担い手不足に悩まされている。地域では住民有志が加工所を新設し、地域の将来をかけて柚子を活かした活性化を行っている。今後も学生が地域活動に参加し、連携を深めていきたい。

活動内容と成果

本年度が初めての活動であるため、学生による現地視察や地域住民・右京区長をはじめとする区役所職員等への聞き取りを通じて、中山間地域集落での生業や高齢化に起因する複合的な地域課題の理解や解決に向けて、連携先の協力のもと取り組みを行った。

7月に水尾地区を訪問した際は、長年自治会長として地域を率いている松尾会長から集落の概要と加工組合の取り組みについて説明を受けた。また、9月には学生が「右京区まちづくり支援制度」に申請して、補助金を獲得し、本年度の活動資金（交通費等）を得ることができた。

それを受け、水尾地区の活性化イベントである「フジバカマ鑑賞会」（10月）や自治会が主催となって実施する交流事業「柚子しぼりボランティア」に、担い手が不足する地域活性化の取り組みを支援した。また、現地での活動は、右京区役所が運営する「右京ファンクラブサイト」に学生が紹介記

事を投稿し、水尾地区のPRに一役かっている。

水尾地区以外での活動として、水尾産の柚子を使用している菓子工房「Halle ハレ」およびその運営母体である社会福祉法人修光学園 飛鳥井ワークセンター（左京区）を訪問し、水尾産柚子が持つ魅力や素材の力を学ぶとともに、柚子産業の川上から川下まで体系的に学ぶことができた。学生による新商品開発（柚子胡椒、パウンドケーキ、クッキー等）や地域交流の拠点となる居場所づくりのアイデアがでるなど次年度に繋がる取り組みとなった。

プレゼン審査にて発表を行う第3学生



収穫までにキズがついた柚子や見てくれの悪い柚子を集めて果汁を搾ります



若い担い手が不足する地域では学生ボランティアも活性化の貴重な戦力です



社会学部
コミュニティデザイン学科 第3学年
桃井 聖士 Momoi Masahi

1・2回生とコロナの影響でコミュデザらしい活動ができていませんでした。3回生になり水尾プロジェクトがはじまり、地域の方々や外部の企業、区役所の方々と関わりながら学習できた事で大学生活の中の自分の学びに自信を持つ事ができました。

大学生らしくて楽しそうな事してるな！と友達から言われることも増え、自分の中で求めていた「やりがい」を感じれた第3学年になりました。



社会学部
コミュニティデザイン学科 第1学年
草野 高文 Kusano Takahumi

水尾は人が少ないが、人が少ない中でも、活性化の活動はできることを知りました。水尾には人を惹きつける魅力があります。

フジバカマを育てたら、アサギマダラが飛んで来たことで、水尾に人も来た。行動を起こすことによって、物事が変化することがわかりました。これからは、水尾の人にもっと話を聞いて、水尾の発展に役に立ちたいです。

9 WA(わ)のこころ創生プロジェクト

担当教員

Matsukawa Takashi
松川 節



Kuramitsu Nobuyuki
倉光 延行



プロジェクトデータ

- 📍 京都市北区
- 🤝 WA(わ)のこころ創生ネットワーク会議(事務局:北区役所)
- 📅 2021年7月~2022年3月
- 👤 社会学部コミュニティデザイン学科 プロジェクト研究実践
- 👤 社会学部コミュニティデザイン学科 第3学年 16名



プロジェクト概要

北区の4大学(大谷大学、京都産業大学、佛教大学、立命館大学)と、伝統文化の担い手や寺社、北区役所が連携して、「WA(わ)のこころ創生ネットワーク会議」を組織し、自然への深い感謝の念や繊細なおもてなしの精神など日本人が大切に、受け継いできた日本のこころを次世代に継承する取り組みを進めています。

本学は、構成団体として、文化事業を通じて、北区民のくらしに文化が息づく「こころの創生」の実現に貢献しています。

これまでは、文化体験や文化ツアーを行っていた本事業でしたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンラインを活用した取り組みの実施を事務局を中心に模索していました。松川ゼミでは、地域連携の取り組みとして、ネットワーク会議に今回の取り組みの提案を行い、実施に至りました。

事業名の「WA」は、「和」「輪」「わ」など、解釈の仕方では創造性が広がるよう、あえてアルファベット表記になっています。

活動内容と成果

取り組み初年度となる今回は、区内の文化的な魅力の発信を行う映像の制作と、区役所ホームページ等での公開によるオンライン体験を松川ゼミから提案しました。会議の委員からはご好評いただき、提案内容の他に上賀茂神社周辺での取り組みなど、次年度に繋がる提案もいただきました。

緊急事態宣言の発令など取材直前まで振り回されることになりましたが、大徳寺のご厚意で、10年にわたる大規模修復工事が行われている大徳寺本坊の作業現場に立ち入らせていただきました。

撮影当日は、作業されている職人の方からその作業の目的などの説明を伺いました。畳の裏側に記された墨書きの文字が読み取れるなど、建立当初から大切に受け継がれてきたことを伺い知ることができました。

学生たちは文化財やそこに息づく文化を守り伝える姿に触れ、WAのこころを映像に収めることができました。また、本坊の修復工事に、普段は非公開の「孤篷庵」の撮影も行いました。ご住職からは、御坊の説明だけでなく、庵で修業を行いながら、守り伝える視点でお話を伺いました。

修復を行う側と使う側、その両面から描くことで、継承すべきところを映像にすることができたのではないのでしょうか。

取材、撮影、編集を第3学年が行っています。見応えある作品となっていますので、ぜひ配信をご覧ください。



普段は立ち入れない貴重な修復現場での撮影です



大徳寺の大規模修繕工場の現場に入ります!



京都市公式YouTubeチャンネル
「きょうと動画情報館」

動画公開中



社会学部
コミュニティデザイン学科 第3学年
小川 渚 Ogawa Nagisa

本坊の保存修理に携わる方々を取材するなど、たくさんの貴重な体験をさせていただきました。普段は立ち入れない保存修理現場等の様子をぜひご覧ください。



10 紫竹自治会応援プロジェクト

プロジェクトデータ

- 📍 京都市北区紫竹学区
- 🤝 紫竹学区自治連合会（北区）
- 📅 2021年7月～2022年3月
- 👥 プロジェクト研究入門、プロジェクト研究実践
- 👤 社会学部コミュニティデザイン学科
第1学年 1名 第2学年 4名 第3学年 1名 第4学年 1名

担当教員
Shido Shushi
志藤 修史



プロジェクト概要

地域住民にとって身近な組織である自治会の取り組みについての現状と課題を、実際の自治会活動の行う取り組みに参加することを通じて学ぶことを目的としたプロジェクトです。

近年自治会・町内会については加入・未加入をめぐる様々な状況、考え方や判断があること、あるいは活動の内容についても形骸化、行政の下請け化が進むなどの指摘があります。一方で、地域での身近な横のつながりを担うことができる、加えて、平時

はもとより災害などの場合に相互の助け合いの機能を発揮できるなどの期待もされています。このプロジェクトでは京都市北区紫竹学区をフィールドに、紫竹学区自治連合会と連携し、自治連合会が実施する活動に参加することを通じて、地域における自治会組織の役割や機能、加入・未加入などのジレンマの現状などを把握し、そこから地域の住民同士の関係性と集団組織の方向性などを探っていきます。

活動内容と成果

2016年度、当該学区において京都市北区の進める「まちづくり学区ビジョン」作成のプロジェクトに取り組みました。また昨年度（2020年度）には学区自治連合会で取り組まれた町内会長向けアンケートの分析や分析結果に基づくワークショップなどを実施しました。このような経過を踏まえ、本年度からは紫竹学区の自治会活動を応援するプロジェクトとしてスタートすることとしました。当初は、学区民祭りや運動会など多くのイベントへ参加し、イベント準備とともに、自治会に関するアンケートを集めるためのブースの設置とアンケート回収の運

営などを担当し進める予定でした。しかし、コロナウイルスの感染拡大に伴う相次ぐ行事の中止により、12月と2月のイベント参加とそこでのアンケートブースの運営参加のみとなりました。

なお、ブースの運営にあたっては、自治会加入・未加入についてのアンケート調査の作成、実施と集計および、アンケートに答えていただいた方への自治会活動PRのため、地元のフェアトレードコーヒー焙煎の専門店との共同で、オリジナルのブレンドコーヒーを作成し、配布しました。



社会学部
コミュニティデザイン学科 第3学年
川井 滉人 Kawai Hiroto

紫竹学区で行われたイベントに参加して、地域の活気溢れる雰囲気に魅了されました。このプロジェクトを通して住民同士のつながりの大切さというものを見出し、追求していきたいと考えてます。



社会学部
コミュニティデザイン学科 第3学年
吉田 めい Yoshida Mei

実際に紫竹学区の方々と手を取りながら自治会について学ぶというこの貴重な機会は、地域について考え、さらには地域の中で実行していくことの面白さまでをも教えてくれています。この活動からさらにたくさんのことを吸収していきたいです。

11 北区こどものまち

プロジェクトデータ

- 📍 京都市北区
- 🤝 京都市北区役所
- 📅 2021年4月～2022年3月
- 👥 プロジェクト研究入門、プロジェクト研究実践
- 👤 社会学部コミュニティデザイン学科
第3学年 3名 第2学年 2名

担当教員
Akazawa Kiyotaka
赤澤 清孝



プロジェクト概要

北区役所が事務局となり実施するニコニコ北っ子「北区こどものまち」は、子どもたちスタッフとなり自身が街の仕組みや、街にあってほしい店などを自由に発想し、仮想のまちづくりを進め、一般応募したこどもを来場者として迎えるイベントです。本学ではこれまで、教育・心理学科、教育学部初等教育コースの学生を中心とした有志学生が、子どもスタッフのサポートならびに当日の運営の手伝いを担い、コミュニティデザイン学科の学生が、正課授業の一部として大人や地域向けの情報発信の役割を担ってきた。これらを通じ、子どもの地域での健全な育成やまちづくりの支援し、取り巻く大人の関わりとサポートのあり方などを学び実践する機会としています。なお、これは北区と本学との協定に基づく事業として位置付けています。

活動内容と成果

昨年度、オンライン実施したワークショップに参加した子どもや学生から募ったアイデアをもとに、北区未来につながる区民会議（事務局：北区役所）が「北区こどものまちボードゲーム」を開発しました。子どもから大人まで、遊びながらまちの賑わいづくりを体験できるオリジナルボードゲームです。

本年度は、学区のおまつりなどでボードゲームの体験する機会を設け、子どもや親子など当日の来場者を対象に体験会を計画していました。本学学生は、体験会でのファシリテート役として、事前に練習を行い当日に臨みましたが、当初予定していた8月や11月のイベントは中止となりましたが、12月5日の紫竹学区で行われた「紫竹ルネサンス」の会場でブースを設け、体験会を実施しました。



社会学部
コミュニティデザイン学科 第3学年
館野 芽生 Tateno Mei

2020年度のこども会議で話し合ったボードゲームが完成しました！実際にこども会議に参加したこどもたちが、自分のアイデアが反映されているゲームを楽しくプレイしている姿は印象的で、私自身も嬉しかったです。小学校でのイベントにも参加させていただき、商品化も進行中なので、今後もっと多くの人に遊んでもらえたらいいなと思います！



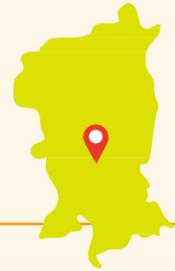
12 祇園祭ごみゼロ大作戦

担当教員
Akazawa Kiyotaka
赤澤 清孝



プロジェクトデータ

- 京都市中京区、下京区（祇園祭山鉾町）
- 一般社団法人祇園祭ごみゼロ大作戦
- 2021年4月～7月（現地活動日：宵山7月15日・16日）
- 人間学II-9
- 全学部対象 22名（参加人数を制限して開催）



プロジェクト概要

世界有数の伝統祭事である祇園祭。祭の山場となる山鉾巡行前の宵山行事期間中は、多くの夜店・屋台が四条烏丸を中心に広範囲で立ち並び、国内外から多くの来場者が訪れます。しかし、来場者数に比例して課題となるのが、紙やプラスチック容器などの廃棄物でした。以前に比べ散乱ごみなどは減ったものの、可燃ごみの量は増える一方でした。そこで2014年、NPO、行政、夜店や屋台、ごみ収集事業者などの協力のもと、使い捨て食器を、繰り返し洗って使用可能なリユース食器に切り替える「祇園

祭ごみゼロ大作戦」を実施しています。学生の参加は、正課授業を受講し、その一環として参加、ボランティアとしての参加の2つの形態があります。授業では、祇園祭の歴史、ごみ問題、環境問題に関わる市民活動の実例など、多様な視点から「祇園祭ごみゼロ大作戦」の背景やこれまでの成果について学び、その上で宵々山・宵山当日の活動に参加し、リユース食器の回収やごみの分別を促す活動に参加し、活動の参加の感想や改善案をレポートにまとめることを計画していました。

活動内容と成果

本年度は、露店出店や山鉾の夜間観覧が実施されなかったため、昨年同様に活動を縮小し、8名程度の小グループに分かれ、鉾町を中心に御射山公園を拠点に鉾町周辺のごみ拾い活動と投棄ごみの分布調査を行った。本部が置かれた御射山公園に戻った後は、グループごとに振り返りを行い、どのような場

所に、どのようなごみが捨てられていたかなど踏査の結果を地図に落とし込む作業を行った。

来年度は2年ぶりに祇園祭ごみゼロ大作戦が実施でき、正課授業の一環、及びボランティア活動として学生が参加できるよう準備を進め、学びの機会として参加を募っていきます。



文学部
哲学科 第2学年
寺田真帆 Terada Maho

ボランティアの内容は例年とは少し違う形で行われ残念でしたが、グループで町中のごみを宝さがしのように見つけ出すのはとても楽しかったです。この活動への参加をきっかけに新しいボランティア活動に参加したり、地域と学生の結びつきについて考えることが増えました。



社会学部
現代社会学科 第3学年
筒井理貴 Tsutsui Satoki

今年は、コロナ禍での取り組みだったため、祇園祭に屋台は出ておらず、普段の祇園祭ほどたくさんの方は訪れてはいなかった。だが、地域のために役に立つ活動、環境を守る取り組みに参加でき、とても良い体験となった。今後もまた機会があったら参加したい。



鉾町のゴミを拾いました



参加対象は
全学部の学生です！



13 北部福祉フィールドワーク

プロジェクトデータ

-  京都府北部
-  京都府
-  2022年2月（オンライン座談会に振り替え）



担当教員
Nakano Kanako
中野 加奈子

プロジェクト概要

本プロジェクトは、京都府北部地域で多様な地域実践を展開している自治体において、地域を基盤としたソーシャルワークの実際を学ぶことを目的としたフィールドワークです。

例年、夏休み期間中に実施していますが、本年度は春休みに一旦延期となり、オンラインを使用するなど調整をしてきました。しかし、新型コロナウイルス感染再拡大を受け、本年度も現地での活動は中止となりました。

活動内容と成果

2021年度は、現地フィールドワークは実施できませんでしたが、現地のソーシャルワーカーの方とオンライン座談会を行い、交流を行うとともに、北部の福祉の現状を学びました。

地域や施設の特性に根ざした実践の豊かさを学ぶ機会となっているだけに、本年度も実施できなかったことは残念ではありません。

本フィールドワークをきっかけに北部地域で就職することを決意した者もあり、学生の学びに大きな影響を与えています。



コミュニティデザイン学科 第1学年 インタビュー実習

京都市北区役所や学区社会福祉協議会、高齢者福祉事業所、保育園、障害者福祉事業所、商店街、PTAなど団体や事業所の方に、これまでの活動内容や生い立ちをインタビューする調査を実施しています。

インタビューレポートの作成を通じて、「地域」を多面的に理解し、学びを深める取り組みです。

フィールドワーク入門

現代社会学科 第1学年

「探究フィールドワーク（左京）」（本誌9ページ）への準備段階として位置付けられている取り組みです。社会調査の基本的な知識やスキルを修得したと認められた学生のみが、次のプロジェクトへ進めます。

学生は、自分たちで調査テーマを設定し、社会調査を企画し、データ収集分析を行います。その成果は、「フィールドワーク成果集」として刊行しています。調査対象は、基本的に大学内に設定しますが、いくつかのグループは学外での調査を行う場合もあります。

地域連携プロジェクトをはじめ準備段階としての地域連携室による学びの支援

14 子ども・子育て支援プロジェクト

プロジェクトデータ

-  京都市
-  京都市楽只保育所（北区）
-  2021年10月～12月
-  おおたにキッズキャンパス演習Ⅲ 幼児教育演習Ⅲ
-  教育学部 教育学科幼児教育コース



担当教員
Tomioka Ryosyu
富岡 量秀（代表）
Ogawa Harumi
小川 晴美
Kawakita Noriko
川北 典子

プロジェクト概要

子育て世帯がたくさん暮らす住宅街という側面を持つ北区。京都市及び北区は子育て政策として、子育て中の保護者の不安や疑問を解消し、地域で孤立しないよう、地域の人たちとの仲間づくりや交流活動を推進している。

大谷大学教育学部教育学科幼児教育コースではこれらを将来保育士や幼稚園教諭など、保育者を目指している学生たちの実践的な学びの機会一とくに近年保育者として必要とされている子育て支援・保護者支援の実践力を身につける学びの機会一として捉え、またそれが同時に地域貢献を実現する試みとしてプロジェクトに取り組んでいる。

2021年度は、新型コロナウイルスの影響により、昨年同様に右記の事業を展開した。本年度も園児が本学に来校する取り組みは実施できなかった。

活動内容と成果

1) いないいないばあ教室

京都市の子育て支援事業である「いないいないばあ教室」を京都市子育て支援事業の北区の拠点園である京都市楽只（らくし）保育所と共同で半期6回実施した。制限の中での実施ということから、楽只保育所での開催となった。また学生の参加も人数を制限し、京都市からの要請により各回3名までとなった。

また例年活動していた、北区の「地域子育て支援ステーション」である紫明幼稚園・のぞみ保育園と連携し子育て相談や子育て講座・園庭開放等に取り組む「あかちゃんにこちゃんサロン」は、本年度は中止となった。

2) 赤ちゃんと保護者を「つなぐ」動画配信

毎年、大谷大学を会場に開催している北区の事業「つながるフェスタ」における「はぐくみ広場」は、対面での実施は中止となった。その代替として主催者側からの依頼があり、学生による赤ちゃんや保護者を「つなぐ」ためのふれあい遊びや手遊びなどの動画配信を教育学部教育学科幼児教育コース3年生全員で取り組んだ。（この取り組みに関しては、地域連携事業としてではなく小川晴美先生の科目「保育相談支援」で対応した）



ニコニコ北っ子つながるフェスタ ON THE WEB

妊娠中や子育て中のご家族にむけて安心して子育てができるよう地域が協働してまちづくり活動を行っています。（オンライン開催）

公開中



「京都市ふるさと納税」を活用して 学生の社会貢献活動を応援しませんか

「ふるさと納税を活用した大学・地域の連携強化等に関する協定」を締結

本学では、京都市が進める「大学のまち京都・学生のまち京都」の魅力向上の取り組みに協力しています。2021年3月には、「京都市ふるさと納税寄付金」を活用した大学・学生と地域のさらなる連携強化を図るため、京都市との連携協定を締結しました。

ふるさと納税の返礼品がもらえて、学生の活動も応援できます！

「京都市ふるさと納税寄付金」の使い道を「大谷大学と協働！」に指定すると、寄付額の一部が本学学生の社会貢献活動の費用に充てられます。また、「大学のまち京都・学生のまち京都」の魅力向上に繋がる取り組みにも活用されます。返礼品の受け取りだけでなく、学生の社会貢献活動を応援いただくこともできます。詳しくは、本学ホームページをご覧ください。



返礼品には、地域連携プロジェクトから生まれた中川産茶葉を使用したクラフトビール「まんまビア！」を醸造している西陣麦酒の商品も対象です。(プロジェクト詳細は本紙5ページ)



地域連携プロジェクト交流会



各プロジェクトを代表して、当日の感想を発表した学生

地域連携プロジェクトの取り組みから数名ずつが代表して、日々活動に奮闘する学生が集まりました。当日は、第1部にプロジェクトごとに活動の様子を発表、第2部にグループディスカッションを行いました。

他のプロジェクトで頑張る仲間たちと、日ごろの苦労や活動の楽しさなどの情報交換を通じて、自分たちの活動を客観的に振り返る機会となり、互いに自らの意欲を刺激しあう場となりました。

日時 2021年12月22日(水) 15:30～18:00
場所 慶間館 K206 教室
参加者 29名(7プロジェクトからの参加)
内容 ・各プロジェクトの活動報告
・グループディスカッション



コミュニティラジオ番組 「大谷大学ハッピーアワー！」

「大学と地域の連携」がテーマのコミュニティFMです。地域連携プロジェクトの取り組みとして、学生が毎週番組を放送中！北区エリアの魅力や取り組みを発信しています。(詳細は、本紙7ページ) ラジオミックス京都のホームページから過去の放送もお聴きいただけます。



「大谷大学ハッピーアワー！」(毎週木曜19:00-19:50)
FM87.0 RADIO MIX KYOTO (ラジオミックス京都)
主なサービスエリア 北区・上京区 <http://radiomix.kyoto/>



北大路エリアの情報発信「キタキタ！」 <https://kitakita.otani.ac.jp/>

コミュニティメディアプロジェクトの取り組みとして、学生がフリーペーパーを発行。冊子と連動したウェブサイトも随時更新しています。京都の他のまちなかエリアと比べて、若い世代向けの情報が少ない北大路エリアの魅力を発信しています。ステキなお店やイベントを学生が取材してます。



大学ホームページ(地域連携室) <https://www.otani.ac.jp/renkei/>

地域連携プロジェクトの概要や取り組みについて地域連携室ホームページにて紹介しています。過去の事業報告書などの発行物もご覧いただけます。



地域連携に関する相談窓口



大谷大学 地域連携室

連絡先 月曜～金曜 9:00～11:30 / 12:30～17:00
(事務休止日・長期休暇除く)

開室時間 〒603-8143 京都市北区小山上総町
大谷大学 響流館1階 教育研究支援課内

TEL 075-411-8015 FAX 075-411-8162
mail commu-labo@otani.ac.jp

* お問い合わせ内容をお伺いの上、担当へお繋ぎいたします
* ボランティア募集など学内掲示に関するご相談は、
学生支援課に直接お問い合わせください (TEL 075-411-8119)

